

小論文課題

以下は筒井康隆の著書「小説のゆくえ」の中で“自分のことば”と題した文である。文を読み「課題」に答えなさい。

実は私という小説家は、辞典をあまり引かない方ではないかと思う。もちろん作家でない一般の方よりは引いているのだろうが。つまり小説家としては、語源探索などをしないのだ。これをやり出すと本来の意味にこだわるあまり自分の書きたいことばが使えなくなるおそれがあるのだ。それは当然、自分の書こうとしていることばが表現したいことを正確に伝え得るかどうか、そのことばの意味を間違えていないかどうか、きわめて心もとない時があり、そういう時には辞典のご厄介になる。

思いついたことばが、どう見ても不相当と思える場合がある。こういう時のためには、同義語を列記してある「分類語彙表」というものがある。しかしこれには語句の意味が書かれていない。その中から最も適当と思えるものを選んで使っても、それはやはり自分のことばではないわけで、どうもすっきりしない。意味が自分の思うものと微妙にズレていたり、副次的な意味が付加されていて、その意味の方が大きかったりする。こういう場合もまた、辞典のご厄介になる。最初に思いついたことばの項目を読むうち、必ずもっといいことばを思いつくのは不思議なことだ。

実は今、アンブローズ・ピアスの「悪魔の辞典」を翻訳中なのだが、その作業中に辞典を引く回数は、小説を書いている時よりもはるかに多い。翻訳といっても、いちばんの問題はやはり日本語なのだ。ピアスのことばをいちばん正確に伝える日本語は、文章は、語句はと辞典を引くわけで、これは自分のことばでなく他人さまのことばだから、こだわりなくピアスの意図を正しく伝えさえすればいいわけだ。しかしこれが難しい。今まで出版された「悪魔の辞典」はピアスの好みもあって、もってまわった文章が多く、現代の日本人に面白さが伝わらないくらいがあったからそれをなくして面白くしようとしているのだが、あいにくあのもってまわった文章が好きという人もいるので困ってしまう。

辞典を引くうち、何やら小説の文章というもののある種の真理に思い至った。最も端的に表現できる語句というのは、もしかして小説の文章に向いていないのではないか。その語句が思いつかず、別の言い方で意味の周辺をぐるぐる回っているような文章こそ小説の面白さではないのか。辞典などというもののない場所やなかった時代に書かれたような文章こそが、真に自分の文章と言えるのではないか。しかしそんな馬鹿なことが言えるのも実は、われわれにとって辞典というものの存在がいかに大きいかを示しているのである。

出典：筒井康隆 「小説のゆくえ」(2003年4月10日初版発行 中央公論新社)
“自分のことば” から抜粋 p214-p215

【課題】文中の下線部「辞典などというもののない場所やなかった時代に書かれたような文章こそが、真に自分の文章と言えるのではないか。」では著者はどのようなことを言いたかったのか。この文の題名である“自分のことば”という意味を考えた上で、741字以上800字以内で論述しなさい。